



拝
読

浄土真宗のみ教え

改訂版
布教読本

浄土真宗本願寺派
総合研究所 編

■『拝読 浄土真宗のみ教え(改訂版 布教読本)』発刊にあたって

二〇一四年六月に法統を継承された専如ご門主は、二〇一六年、「伝灯奉告法要」で、ご親教「念仏者の生き方」を示されました。このご親教は、宗門の伝道とさまざまな活動の基本的な方向を示したものといえましょう。

「念仏者の生き方」では、まず釈尊が見抜かれたこの世界のありのままの真実である無常、縁起、無我という仏法の基本的な教えが丁寧に表示され、続いて、親鸞聖人が阿弥陀如来の本願名号による救いに出遇われたこと、また、煩惱から離れられない私たちをそのままに救いとつてくださる阿弥陀如来の慈悲のありがたさを示され、さらに、阿弥陀如来のご本願を聞かせていただくことで、私たちの生き方が少しずつくり変えられ、育てられていくことを、『仏説無量寿経』の「少欲知足」や「和顔愛語」という言葉や親鸞聖人のご消息を引いて、具体的に示されています。

さて、『拝読 浄土真宗のみ教え』は、二〇〇九年に発刊されて以来、現在に至るまで、四十万部を超える部数が皆さまの元に届けられ、法事法要の場をはじめ、さまざまな場面で拝読されています。また、『拝読 浄土真宗のみ教え(布教読本)』は、その『拝読 浄土真宗のみ教え』の内容をさらに詳しく学ぼうとする方々のために、また他方で、布教伝道を志す方々の研鑽に役立つことをめざした資料として、二〇一三年に刊行されたものです。

このような経緯を踏まえ、『拝読 浄土真宗のみ教え』は、引用された親鸞聖人のご消息、「念仏者の生き方」、さらに「念仏者の生き方」の肝要を、若い人やみ教えにあまり親しみがなかった方々む

けに四カ条にまとめた「私たちのちかい」を含めて、二〇一九年に改訂されました。その改訂の詳細については、『拝読 浄土真宗のみ教え』（改訂版）巻末の「『拝読 浄土真宗のみ教え』改訂にあたって」を参照ください。

特に、『拝読 浄土真宗のみ教え』（改訂版）の「親鸞聖人のことば」には、新たに「阿弥陀仏の薬」が収録されたことから、『拝読 浄土真宗のみ教え（布教読本）』もそれを承けて加筆し、「改訂版」として発刊することになりました。これを機に、この布教読本がいつそう活用されることを期待いたします。

二〇二一（令和三）年三月三十一日

浄土真宗本願寺派総合研究所長 丘山 願海

■ 発刊にあたって（本書の特色）

本書は二〇〇九年に発行された『拝読 浄土真宗のみ教え』を受けて、その内容をより親しみやすく味わうために編集しました。『拝読 浄土真宗のみ教え』は、何度も繰り返し拝読・拝聴していく中で、み教えに出あえたよろこびを深めていただくことが大きな特徴です。その内容については好評の声を多数いただいておりますが、それはご法義の要が凝縮された、拝読用の文章であることから、「もっと身近な例え話なども交えて、み教えに出あえるような書籍も発刊してほしい」との要望が寄せられました。

また一方で、布教伝道を志す若手布教使の研鑽に資する伝道書籍が必要であるとの要望もありました。特に、み教えに出あうご縁があまりなかった一般の方がたに対して、阿弥陀如来のおこころを身近に感じていただけるようなご法話をするには、なかなか難しいものです。

本書はこれらの要望を受けて、より多くの方がたにみ教えに出あっていただくためのご縁となるよう、『拝読 浄土真宗のみ教え』をさらに広い視点から味わえるような身近な例話を作成、ないしは既刊の法話集から引用し、それらを収録したものです。布教を志す多くの僧侶が、本書を手がかりやヒントとして、法味豊かで親しみやすい法話を作成していただけることを願っています。

二〇二三（平成二十五）年三月二十日

浄土真宗本願寺派総合研究所長 佐々木惠精

■本書の各章の構成

本書は『拝読 浄土真宗のみ教え』に収められている「親鸞聖人のことば」全十六章について、各章毎に最初に「聖典のことば」を掲げ、それをもとに解説と例話をつけています。各章の構成は、以下のとおりです。

〈聖典のことば〉

〈聖典のことば〉 出典・解説

〈聖典のことば〉を味わう

例話① 〈○○○○〉

例話①とみ教えの関連

例話② 〈○○○○〉

例話②とみ教えの関連

例話③ 〈○○○○〉

例話③とみ教えの関連

例話をうけて

教学的背景の解説

なお、各例話の見出しの下に、その例話が伝えようとしているみ教えのポイントを示しています。これらをもとにして法話を作成するならば、「聖典のことば」がご讚題になるでしょう。そして「〈聖典のことば〉 出典・解説」「〈聖典のことば〉を味わう」が、法話の導入や法義説となります。次に法話の展開としての「例話」があり、「例話をうけて」あるいは「教学的背景の解説」が、合が法ぽうに相当します。

■本書の活用方法

本書は、特に若手の布教使が法話を作成するために資する材料として作成されました。ただし、法話の内容や流れ、ボリュームは、それぞれの法座、年忌法要、お通夜など、場面によって違います。そこで、参考までに、活用方法の一例を示しておきます。

例えば、法話の基本的な構成は、讚題・序説（導入）・本説（法義説・譬喩・因縁）・結勸（合法）となります（浄土真宗本願寺派 総合研究所ホームページ「布教伝道の基礎」をご参照ください）。この場合、本書の各章の内容で、それぞれの例話と味わいをヒントにすれば、一座の法話ができると思います。なお、「〈聖典のことば〉 出典・解説」や「教学的背景の解説」については、少し教学的に立ち入った内容もあるので、法話では省略してもいいでしょう。しかし、勉強会などでは必要な情報であると思いますので、ぜひ活用ください。

また、十分間ぐらいの法話であれば、讀題を省略し、例話をひとつ取り上げて、自分なりのお話をし、「例話をうけて」を参考に結勸（合法）をするという方法も考えられます。

他にも、例えば、本書において、「凡夫」の章におかれている例話を「人生そのものの問い」をテーマとする法話で用いることも、もちろん可能です。ご自身で、いろいろと工夫をされながら、法話を作成してみてください。

■ 注意点

本書の内容と流れをそのまま、法話にしてお話することもできますが、できるだけ遠慮していただきたいと思います。やはり、ご自身の体験にもとづいたオリジナリティのある法話を作成していただくことがベストです。

ところで本書の各々の例話の性格は、およそ次の三つに分類できます。なお、各章に三つの例話が置かれていますが、その三つが、この①②③に対応しているわけではありません。

- ① お聖教にある譬喩をもとにしたもの
- ② 歴史的な出来事や物語・伝承にもとづくもの
- ③ 個人の体験にもとづくもの

このうち、①お聖教にある譬喩をもとにしたものについていえば、本書に収められた例話は、少しアレンジをしていることから、ご自身で出典を確認することをおすすめします。お聖教本来の意味をしっかりと確認したうえで、法話を作成するほうが、きっと自分の身についた話になると思われます。

また、②歴史的な出来事や物語・伝承にもとづくものは、本書では紙面の都合から細部を割愛して、コンパクトにまとめたものを例話として掲載しているものもあります。ですから、これもご自身で調べてから、話をふくらませるなどして、法話を作成したほうがいいでしょう。

最後に、③個人的な体験をもとにした例話はとくに、そのまま使用することは、あまりお勧めしません。話し手自身の実体験とかけ離れた話になると、聞き手には何も響かないからです。したがって、そのような例話については、それをヒントとして、ご自分なりのアイデアを加えたり、コンセプトを再構成したりするなどして、ご自身の体験に引き寄せて、話を作成するなどの工夫をお願いします。

こうした工夫は必ず必要です。ご自分なりのアレンジを加えて、より臨場感のあるものにしていただければ、より味わい豊かな法話ができていくのではないのでしょうか。

目
次

- 『拝読 浄土真宗のみ教え(改訂版 布教読本)』発刊にあたって 3
- 発刊にあたって／本書の特色 5
- 本書の各章の構成 6
- 本書の活用方法 7
- 注意点 8

人生そのものの問い【人間】……………17

- ① 宗教の救い／チョコレートパフェを食べると……………22
- ② 黑白二鼠のたとえ／甘い蜜……………24
- ③ 小林一茶の悲哀……………27

凡夫【煩惱】……………35

- ① つい腹を立ててしまう……………40
- ② 鬼は内／私の中に鬼がいる……………42
- ③ つい比較してしまう性分……………43

真実の教え【釈尊と経典】……………51

- ① 五徳瑞現／ひかり輝くかおばせのお釈迦さま……………55
- ② 唯聴弥陀本願海……………57

- ③ 真実の教え／お経さまは鏡のごとし……………60

限りなき光と寿の仏【阿弥陀如来】……………65

- ① 限らない光といのちの仏さま……………69
- ② 立ちすがたの阿弥陀さま……………72
- ③ 阿弥陀さまに救われる私は、猿の子か？ 猫の子か？……………74

他方本願【本願】……………79

- ① 他方優勝？……………83
- ② 風は見えないが、確かに吹いている……………85
- ③ 磁石のたとえ……………87

如来のよび声【名号】……………93

- ① 万徳の帰するところのお名号……………97
- ② 親のよび声……………99
- ③ 本堂にひびきわたるお念仏……………101

聞くことは信心なり【聞即信】

- ① そのままに聞くゝ聞くままが信心
- ② 「大丈夫」の一言
- ③ 蓋ある水に月は宿らじ

今ここでの救い【信の一念】

- ① 藤原道長の最期
- ② 安心の迷子
- ③ はじめてのおつかい

愚者のよろこび【二種深信】

- ① 暗闇を照らす光
- ② 救いの目当てゝあらゆるものを救いとるゝ
- ③ 私の頭には角がある

阿弥陀仏の薬【触光柔軟】

- ① この程度ですけど

- ② 骨は拾ってやるから思い切ってやってみろ
- ③ 薬の効能

報恩の念仏【利益】

- ① 病室でのお念仏
- ② 思わず名をよぶ
- ③ 親の願いに生きること

浄土への人生【証果】

- ① さとりの華を咲かすいのち
- ② 近道すれば南無のひと声
- ③ 楽を願う？

自在の救い【環相】

- ① 先だつわが子は善知識
- ② アツ君、下向いたらあかんで！
- ③ 親父のおかげで

光の浄土【浄土の本質】

- ① 光に満ちた世界 215
- ② ご冥福をいのる？ 217
- ③ 凡情がそのまま、さどりの仏に 219

美しき西方浄土【西方浄土】

- ① 西方と示された意味 232
- ② 彼岸への道 235
- ③ あかねの雲は美しきかな 237

かならず再び会う【俱会一処】

- ① 分骨のご縁 249
- ② 今は会えないの？ 251
- ③ 待っていてくれる人 253

参考文献一覧 260

あとがき 261

人生そのものの問い

日々の暮らしのなかで、人間関係に疲れた時、自分や家族が大きな病気になった時、身近な方が亡くなった時、「人生そのものの問い」が起こる。「いったい何のために生きていくのか」「死んだらどうなるのか」。

この問いには、人間の知識は答えを示せず、積み上げてきた経験も役には立たない。

目の前に人生の深い闇が口を開け、不安のなかでたじろぐ時、阿弥陀如来の願いが聞こえてくる。

親鸞聖人は仰せになる。

弥陀の誓願は無明長夜のおほきなるともしびなり

「必ずあなたを救いとる」という如来の本願は、煩惱の闇に惑う人生の大いなる灯火となる。この灯火をたよりにする時、「何のために生きていくのか」「死んだらどうなるのか」、この問いに確かな答えが与えられる。

〈聖典のことば〉

「誠知無明長夜之大灯炬也何悲智眼闇」といふは、「誠知」はまことにしりぬといふ。弥陀の誓願は無明長夜のおほきなるともしびなり。なんぞ智慧のまなこ闇しと悲しまんやとおもへとなり。「生死大海之大船筏也豈煩業障重」といふは、弥陀の願力は生死大海のおほきなる船・筏なり。極悪深重の身なりとなげくべからずとのたまへるなり。

『尊号真像銘文』（『註釈版聖典』六六九―六七〇頁）

▼解説

これは、親鸞聖人が『尊号真像銘文』において、聖覚法印の銘文を解説されたものです。聖覚法印とは、親鸞聖人の法兄で、藤原通憲の孫にあたります。唱導師（説教師）としても著名で、専修念仏の教えをひろめました。この場合の「法印」とは僧位のひとつです。

さて、本書は親鸞聖人が、その当時に本尊として安置された名号や祖師の絵像の讃文を集め、その内容を解説されたものです。

また『正像末和讃』には、

無明長夜の灯炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障おもしとなげかざれ

（『註釈版聖典』六〇六頁）

と阿弥陀如来の救いを讃嘆されています。

▼現代語

「誠知無明長夜之大灯炬也何悲智眼闇」というのは、「誠知」とは、本当に知ることができたということである。阿弥陀仏の誓願は無明煩惱の暗く長い夜を照らす大きな灯火なのであり、智慧の眼が暗く閉ざされているなどと悲しむことは少しもないと思えというのである。「生死大海之大船筏也豈煩業障重」というのは、阿弥陀仏の本願のはたらきは迷いの大海を渡す大きな船・筏なのであり、きわめて深く重い罪悪をそなえた身であると嘆くこととはないといわれているのである。

（『尊号真像銘文（現代語版）』五一―五二頁）

〃智慧のともしび〃を味わう

私たちは、人生において大きな壁にぶつかった時、「何のために生きているのか」「死んだらどうなるのか」「亡くなったあの人はどうなってしまったのか」とさまざまに思いをめぐらせ

てしまいます。不安の中で、この悩みは解消されるのだろうか、夜明けは来るのだろうか、と心の中に闇がひろがります。まさに底知れぬ闇です。こうした究極的な問い、宗教的な問いは、人間の知識や経験では解決しようがありません。

そうした闇に灯火となつて、はたらかれているのが阿弥陀さまです。阿弥陀さまは、私たちに仏さまのような智慧がないからといって悲しむ必要はない、深い罪業で救われないのではないかと考える必要はない、とはたらかけてくださっています。

宗教の救い〜チョコレートパフェを食べると〜

ポイント

根本苦

みなさんは、チョコレートパフェを食べたことはあるでしょうか。私は甘いものが大好きなので、パフェは大好きです。これを口にするひときは、とても幸せな気持ちになります。バナナやイチゴなどのフルーツ、とってもおいしいですね。クリームやチョコレート、とっても甘いですね。

甘いものが好きな人にとっては、ほんとにおいしくいただくことができ、とても幸せな時間が過ごせます。ところが私はいつも、どうしてもひとつだけ困ってしまうことがあります。それは、最後の最後にグラスの底にクリームが残ってしまうことです。

チョコレートパフェを最初は「おいしい、おいしい」といただくことができます。これと同じように、人生のなかでものごとがうまく運んでいる時は、楽しくて仕方がありません。しかし、チョコレートパフェがだんだん残り少なくなっていくのと同じように、楽しい時間の終わりが近づくにつれて、なんとなく寂しい気持ちになったりしませんか。そして、最後の最後、このクリームを何とかして掬い取りたいのに、どうしても掬えない。こんな時、とてももどかしい気持ちになるのは、私だけでしょうか。どうにもならないことはわかっていますが、何とかしたいという気持ち、生きていくうえで、出てくることはありませんか。あきらめたほうがいいのかとわかっている、どうしてもあきらめきれないこと。このように生きていくうえで、自分ひとりではどうしようもない部分、根本的な苦しみに必ず出あいます。これを解決しようとするはたらきが、宗教の救いなのです。

〈例話①〉とみ教えの関連

お釈迦さまは、人生が「一切皆苦」であると説かれました。私たちは、自分が苦しい時「なぜ」について自分だけがこんなことか……と考えてしまいます。苦しみの大きさや深さをくらべることはできませんが、みなそれぞれに人生に苦しみはあるでしょう。仏教が説いている苦しみの代表的なものに、四苦八苦というものがあります。この八苦とは、生老病死の四苦に、愛別離苦（愛しい人と別れなければならない苦しみ）、怨憎会苦（憎い人と会わねばならぬ苦しみ）、求不得苦（求めても得られない苦しみ）、五陰盛苦（思うようにならない身心に煩わ

例話 2

される苦しみ)を加えた八苦です。

人生が順風満帆に進んでいる時が、パフェをおいしく食べている時です。ところが、そんな時期があったとしても、必ず思い通りにならないことに直面します。若くて元気だった時は、思い通りに体が動いたのに、年をとったり、病気になったりすると、思うようなことができなくなります。そして生まれたからには死は避けられませんが、それがいつやってくるのかはわかりません。人はいつか必ず死ぬということは、愛しい人との別れが必ずやってくるということです。

こうした苦しみ直面するなかで、お釈迦さまは、私たちが苦しみを感じてしまう原因を探求されました。私たちは、苦しみの原因をつい自分を取りまく周囲の環境にあると考えますが、じつは苦しみの原因は、この私の煩惱にあったのです。こうして煩惱のせいで、闇に迷うのが私たちのありさまです。しかしこのように煩惱の闇に惑う私たちに、何とかして救いを与えようと、いまここではたらいておられるのが、阿弥陀如来でありました。

黒白二鼠のたとえ〜甘い蜜〜

ポイント

生死無常

昔、ある男が罪を犯し、広い野原を逃げていました。すると、後ろから王さまが放ったゾウが追いかけてきます。あわてて男は、まわりを見わたしますが、身を隠すところがありません。必死で逃げまどっていると、井戸があるのを見つけました。しかも井戸につる草が垂れ下がっています。それをつたって、井戸の中に身を潜めることにしました。

しかしほっとするのも束の間、目の前に黒と白の二匹の鼠ねずみが出てきて、かわるがわるにつる草をかじっています。下を見れば古井戸の底で、一匹の大きな龍が口をこちらに向けています。このつる草が切れると、命はないことはいまでもありません。さらに、四匹の毒ヘビが井戸の四辺にいて、男の落ちてくるのを待ち受けています。このままでは確実に細いつる草はちぎれて、龍や蛇に食べられてしまいます。男は恐怖に身を震わせていました。その時、ミツバチの巣から甘い蜜が五滴、口のなかに落ちてきました。そのなんとも言えない蜜の甘さに心が奪われ、もつと甘い蜜をなめたいと思って、体を伸ばすのですが、つる草がいまにも切れそうになっています。

このたとえば、まさに私たちの命の危機的な状況をあらわしています。にもかかわらず、男は甘い蜜の誘惑に負けているのです。このたとえ話を他人事だと思う人もいるかもしれませんが、けれども生死無常の風は、どこか遠くで吹いているのではなく、いつでも私のまわりに吹いているのです。

【参 考】『仏説譬喻經』(『大正新脩大藏經』第四卷 八〇一頁中〜下)、
『衆經撰雜譬喻』(『同』五三三頁上〜中)

例話 3

小林一茶の悲哀

ポイント

愛別離苦

有名な江戸時代の俳人、小林一茶は苦勞を重ねた生涯を送りました。生後一カ月の長男、生後一年の長女を亡くしています。さらに、次男、三男が亡くなり、妻とも死別します。本当に辛い別れがつづきます。このような厳しい人生の別れを体験しながら、一茶は浄土真宗のみ教えに深く帰依きえしていきます。

有名な『おらが春』の最後の句は、

ともかくも あなたまかせの 年の暮

です。この句には、いろいろな苦しみや別れを体験した中で、すべてを阿弥陀さま（あなたの本願力にまかせきつていくという思いがあらわれています。この「まかせる」ということは、何もかもなげやりにして無気力になることではありません。厳しい生死の現実に向きあわねばならない人生を阿弥陀さまの本願力に生かされる身であることをあらわしています。

この世に変化しないものなど存在しません。それは、私の周囲や私自身についてのことでもあります。私たちは、その変化によって起こる厳しい現実に向かい合わなければなりません。そこには、一茶のように死別・離別などの大きな苦しみや悲しみが待っているのかもしれない

〈例話②〉とみ教えの関連

ここに出てくる広い野原とは私たちの永い迷いをたえています。私たちは、この広い野原をあてもなくさまよっているのでしょうか。そして、多くの人はこの迷いに気づかずにごくしているのかもしれない。あるいは、迷いを見ないようにして、生活をおくっているのかもしれません。そういう状況のなか、ソウは無常が襲ってくることをたえています。そして、井戸は人生をあらわし、つる草は、はかないのちをたえています。黒白の二匹の鼠は昼と夜をたとえ、私のいのちが徐々に終わりに近づいていることを示しているのです。ふりかえってみれば、あつという間に毎日がすぎていくことをあらわしています。

井戸の周りの四匹の蛇は地・水・火・風の四大を、五滴の蜜は色・声・香・味・所触の五欲をたとえています。ミツバチはよこしまな思いをたとえています。そして龍は死をたえています。

このたとえは、私たちは死を目前にしながらも、それを見ないようにして、目の前の欲におぼれてしまつたことを伝えようとしています。いつまでもこのままの状態が続くように思っているのは錯覚であると教えてくれます。ですから世間の楽に心奪われることなく、つねに生死無常のことわりに思いをいたして、苦悩の解決を求めていかなければならないのです。

ん。阿弥陀さまは、私たちが目の前の現実をなかなか受け入れることができません、悲しみにくれ、苦しみにもだえる気持ちをやさしく、あたたくつつみこんでくださる仏さまです。苦難に沈んでいる時にこそ、阿弥陀さまは、「われにまかせよ」と力強く、そしてやさしくよびかけてくださっているのです。その大いなる心に出あうことで、私たちは生かされていくのではないでしょうが。

〈例話③〉とみ教えの関連 ……………

例話①のところに書いてあるとおり、仏教が説く苦しみの一つに愛別離苦という苦しみがあります。愛別離苦とは、愛する人、愛しい人との別離の苦しみです。大切な人の死は、場合によっては、自分の死よりも、つらく苦しいものです。覚如上人の『口伝鈔』第十八条は、冒頭に「愛する人との別離という苦に出あつて、悲しみ嘆いている人には、仏法の薬を勧め、その悲しみにふさがれた心を教え導くべきである」と述べたうえで、次のように教示されます。

人間の八苦のなかに、さきにいふところの愛別離苦、これもつとも切なり。まづ生死界のすみはつべからざることわりをのべて、つぎに安養界の常住なるありさまを説きて、うれへなげくばかりにて、うれへなげかぬ浄土をねがはずんば、未来もまたかかる悲歎にあふべし。

〔註釈版聖典〕九〇七頁

ここで覚如上人は、人として生まれてきたからには避けることのできない愛別離苦の悲しみは、もつとも切実であるといわれます。そのような苦に出あつて、悲しんでいる人には、まず人間界は、生まれてきたかぎりはかならず死なねばならない境界であつて、いつまでも住み続けることはできないという道理を説きなさいと示されます。つぎに安養の浄土は常住不変で安らかな境地であることを説き聞かせなさいと勧められます。そして、浄土を願わなければ、未来もこのような悲嘆に遭わなければなりません。この言葉に続けて、悲嘆にくれている人に対しては、悲しみに悲しみをそえるようなことがあつてはならないとたしなめられます。

別離の悲しみに沈んでいる人に対して、その悲しみをともに悼み、慈しみのところで寄り添ってくださる阿弥陀如来の深い慈悲のお心がそがれています。

例話をうけて

人生は苦しみの連続です。それをお釈迦さまは「一切皆苦」と教えられます。もちろん生きていくなかで、楽しいことやうれしいこともあるでしょう。しかし、それがずっと続く人生は

なかなかないのではないのでしょうか。たとえ一時の楽があったとしても、それが苦に転じることもあります。あらためて考えてみると、人生は、思い通りになることはほとんどなく、思い通りにならないことがばりです。

私たちの心を煩わせ、悩ませる煩惱がなくなれば、苦しみを感ずることもないのでしよう。少し言い方をかえれば、こうした苦しみの現実をすんなりと受け入れることができたならば、あるいは苦しみを乗り越える強い力があつたならば、それほど苦しまないのかもしれない。しかし、そうはいかないのが私たちです。あきらめることができれば、苦しみはなくなるのかもしれませんが、あきらめきれないこともたくさんあるのではないのでしょうか。自分の死に直面した時、あるいは大切な存在を失った時、「無明長夜」と表現されるような、深い闇が目の前に広がっていきます。

しかし、このどうにもならない人生を根底から支えてくださっているのが阿弥陀さまです。この真っ暗闇に一点の灯火となるのが阿弥陀さまの大悲のところです。その灯火が確かな依りどころとなる時、「煩惱の闇に惑う人生の大いなる灯火」となることでしょう。

仮に私が灯火に気づかずに、ひとり孤独を感じて闇をさまよっていたように思っているとしても、じつは阿弥陀さまはずっと寄り添ってくださっていたのです。

阿弥陀如来は、このような無常に直面し悲嘆にくれる私を、慈悲の心をもって、あたかもひとり子を見守る親のように見ておいでです。そして、厳しい現実を安心してこの人生を歩める

ように、つねに私のそばで苦しみを背負いつつ、ともに歩んでいてくださったのです。お念仏による救いは、決して変わることはない、常住の法だからこそ、無常である私を常に変わらずに支えてくださる、私の人生の依りどころとなるのです。

教学的背景の解説

仏教とは、いまからおおよそ二千五百年前に、釈尊が私たちの苦しみを根本的に解決することを示された教えです。釈尊は、釈迦族の王子として生まれ、何不自由のない生活を送っていましたが、どれほど物質的な豊かさがあつても、老いていき、病にかかり、死んでいかねばならない苦しみからは逃れられないと気づかれました。この苦しみの原因は、煩惱であり、それが滅した状態が、さとりです。この苦しみの原因を滅していく実践が、八正道はつじょうどうなどの仏道修行です。ちなみに八正道とは、さとりに至るための八種の正しい行法のことです。正しく見ること（正見）を根本として、そのうえで正しく考へることなどの七つの項目（正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定）が続きます。

ところが親鸞聖人の立場は少し異なります。それは、私たちは煩惱を滅することができないという立場にたれたことです。「正信偈」に「煩惱ぼんのうを断たぜずして涅槃ねはんを得うるなり」（『註釈版聖典』二〇三頁）とあるように、浄土真宗は、みずからの修行によって煩惱を滅することが求められているのではなく、

この私の心の奥底に根付く煩惱に気づかされていく教えます。みずからの煩惱に気づくことができたのは、法に照らされているからこそであり、そこにはすでに救いの法が届いているのです。救いの法が届いているとはいえ、煩惱がなくなるわけではありません。いまここで煩惱を断つことができなくとも、阿弥陀如来によって救いが届けられ、そしてこの世の命を終える時に、阿弥陀如来のはたらきによってさとりを得ることができるとは、煩悩がとめどなく湧いてくるのが、この私のすがたでありました。それゆえに苦しみもまた、つき

ることはありません。しかし、この苦しみをともに背負い、支えていこうとされている阿弥陀如来がおられます。その阿弥陀如来の大いなる智慧と慈悲が、無明長夜の確かな灯火となるのです。親鸞聖人は、『正像末和讃』に次のように讃嘆されます。

無明長夜の灯炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障おもしとなげかざれ

〔註釈版聖典〕六〇六頁

親鸞聖人による「灯炬」についての註釈によれば、「灯」とは「常の灯火」であり、「炬」は「大きな灯火」です。阿弥陀如来は、煩惱の闇のなかに、決して消えることのない大きな灯火となつてくださっているのです。この灯火があるのですから、私たちに仏さまのような智慧がないと悲しむ必要

はないのです。

和讃の後半では、如来の大悲が、迷いの海をわたる船や筏にたとえられています。阿弥陀如来は、私たちが、ひとり迷いの海に投げだされたならば、そこを泳ぎ切る力はないと見抜かれました。だからこそ、この生死の大海原で、ただ沈むほかない私を大きな船に乗せてくださるのです。如来の広大な救いは、私たちの罪業がどれほど深く重かつたとしても、それがさまたげとなることはありません。ですから、深い罪業のせいで救われないのではないかと卑下する必要もないのです。

本願の救いに出あえば、悲しみや苦しみの中に、「お浄土がある」「この私のために阿弥陀さまがいてくださる」という新たな世界が開けてきます。ここに、苦しみがくしかなかった人生の中で、本願に出あうという「確かな答え」が与えられるのです。